

村木厚子さん夫妻、岩川徹さん夫妻の資料

3つの冤罪事件とメディアの嘆かわしい関係

◆ 検察が空想で「作った」事件



「証拠品改竄・犯人隠避の容疑で、前・特捜部長起訴」
「検事総長が謝罪会見！」

こんなミダシと写真で、前代未聞のニュースが流れたのは、2010年10月21日のことでした。

その4日前、村木厚子さんのパートナーで、きょうこの会場にもいらっしゃる村木太郎さん（厚生労働省総括審議官）からメールが届きました。

「ゆきさんへ／ご心配いただいた方々へ、えにしメールで厚子の手紙の転送をお願いできませんでしょうか。」
「えにしメール」は、ここにお集まりのみなさまご存じのＢＣＣメール。医療と福祉／現場と政策を隔てている深くて広い河に橋をかけ、マスメディアでは軽視されている福祉医療の大事な出来事を、週1回ほど、「志高い」と私が直感した方々に送っているものです。

◆ 「孤独感を感じず1年3カ月余り」◆

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）という新しいポストが末尾に記してある厚子さんの手紙を抜き書きしてみます。

9月21日の夜、弘中弁護士から、「大阪地検から、上訴権を放棄するという連絡がありました。おめでとう」という電話がありました。

「検察との闘いが終わったんだ」という思いがこみ上げ涙がこぼれました。

娘がギュッと抱きしめてくれました。

最後まで闘うことができたのは、皆様がずっと応援して下さったおかげです。

拘置所に勾留された人の心理として、「みんな自分から離れていく」という強い孤独感があるのだそうです。

私は、この1年3カ月余りの間、一度もそうした孤独感を感じずに過ごすことができました。

家族も一度も疎外感を味わうことなく過ごすことができました

◆ 自分の出世のために、部下に偽造させた???◆

「村木厚子さんご家族に励ましを」と、えにしメールで呼びかけたのは、逮捕されて12日後の2009年6月26日。奇しくも壇上に並んでおられる潔ドンたちが活躍する北海道・浦河の「べてるまつり」会場からの送信、こんな文章でした。

厚生労働省の村木厚子さんが、囚われの身になっています。ご家族と会うことも許されず、「私は、関与していません」と気丈に言い続けておられます。応援している方々の名前を、弁護士さんが接見室の窓越しに伝えることができるだけですが、近いうちに渡せるようになるでしょう。ご家族に励ましの思いを伝えることは、いまでもできます。お立场上匿名希望の方はその旨、お書きになって、小間使い、ゆき、yuki@spa.nifty.com までメールを

匿名希望の方は」と書いたのには、わけがありました。当時の新聞、テレビは、厚子さんを
「政治家の言いなりになって」

「部下に無理に文書偽造させた」

「立身出世主義の悪徳女官僚」

と伝えていました。



左の写真は、無罪が確定して厚生労働省を訪ねた、ふだんの厚子さんの表情です。

ところが、逮捕後の新聞・テレビは、どこから探し出してきたのか、思い切り険しい表情の厚子さんの写真を繰り返し使って、悪女の印象を読者に植えつけていました。

そんな雰囲気社会に満ち満ちていましたから、公的な立場にあるひとは、表立っては応援できない事情があったのです。

私が「えにし」のHPに、「メディアと冤罪の部屋」を増築したり、「えにしメール」で冤罪を訴えたりすると、私の立場を大層、心配してくれる友人知人が大勢いました。

けれど、「女は度胸」が信条 (^_^)-☆。数えてみたら、1年4カ月の間に20回以上、えにしメールで厚子さんの無実を伝えていました。

◆荒唐無稽・検察の動機不在のストーリー◆

その第1の理由。厚子さんには、動機がまるではありません。検察は、

- ①民主党の石井一代議員が、かつての部下に頼まれて、無理な話を厚子さんに持ちかけた。
- ②厚子さんは、「障害者自立支援法」を成立させるためには、「議員の言うなりになるしかない」と考えた。
- ③そこで、自身の印を部下に偽造させた。

という荒唐無稽な筋書き、「ストーリー」をメディアに流し、ほとんどすべてのメディアがそれを鵜呑みにしているように見えました。

けれど、この筋書きは、3つが3つとも辻褄があいませんでした。

- ①石井議員は当時は野党。その上、障害問題に関心が薄く、この分野にはまったく影響力がない人物でした。厚子さんが気を使う必要は皆無でした。
- ②自立支援法が取引材料にはなるはずもありませんでした。係長が偽造したとき、この法律案は、まだ影も形もなかったからです。それに、
- ③自身の公印の偽造を部下に命じる必要もありません。

科学部の駆け出し記者が、社会部の敏腕記者の記事に棹さず解説を書くときの気持ちは悲壮でした。けれど、一大決心をして「自然流行か犯罪か〜チフス菌事件核心へ」を書きました。幸い、一番は、科学者たちの証言によって無罪。

けれど、連日の報道で先入観を植えつけられていたのでしょうか。二審・最高裁の判事は有罪を判決しました。私は冤罪に敏感になりました。

◆福祉の町・旧鷹巣町でも◆

「安心して年をとれるまちづくり」に取り組み、日本一の福祉の町に育てた秋田県の旧鷹巣町長・岩川徹さん（写真左端）にも、村木さん同様の運命が襲いかかりました。



2009年7月13日に公職選挙法違反の疑いで逮捕され、夫人とも面会できない日が1年以上続きました。

村木厚子さんの事件とは共通点が3つあります。

- ・ご本人が否定し続け、そのためか、異様に長い拘留が続きました。
 - ・「岩川さんに買収された」と「自白」したとされた人物が、釈放後、証言を翻しました。
- 「受け取った30万円は、運転手としての2カ月分の報酬とガソリン代」という証言には説得力があります。このアルバイトの運転手さんは、父子家庭。ハンディのある子をかかえているため「早く留置場を出たかった」「捜査側の筋書きを認めれば罰金で済むといわれたためサインしてしまった」と語っています。

事件の背景には、「福祉より利権」という、この土地に長く続いた政治構造も見え隠れします。

3つめの共通点。それは、重要な日付にかかわる証拠改竄です。

2つの事件には相違点も3つあります。

無実の罪で有罪になった運転手さんは弁護士にツテもなく、国選弁護人は真実をつきとめようという気概に欠けていました。岩川さんも弁護人に恵まれず、厚子さんと違い、夫人にさえ会えない日が1年以上続いたのです。そして、この4月、執行猶予つきの有罪。控訴手続き中です。

◆東北の町でひっそりと◆

私が冤罪と信じている鈴木充さんは、最高裁判決ののち、医師免許を取り上げられ、東北のまちでひっそり暮らしています。

マスメディアに罵倒され、写真のように、もみくちゃにされた悪夢を忘れることができず、再審への道をみずから閉ざしています。



いま、人々は検察や検察に操られた報道を批判しています。けれど、操られてきたのは、検察報道に限ったことでしょうか？

寝かせきりにされて起きられなくなった人のことを「寝たきり老人」と無造作に表現するメディアが今だに横行しています。ご本人は決して「待機」などしていないのに、ほとんどのメディアが、役所の発表のまま「施設待機者42万人」と書き続けています。

インフォームド・コンセントの意図的な誤訳である「説明と同意」という発表を鵜呑みにして広めたのはメディアです。「国民負担率」という国際的に通用しない用語を旧大蔵省の発表そのままに広め、社会保障費を低く抑えこむ政策に加担したのもメディアなのです。